

表1 ストレート展開になる4つの主な配球パターンと1球目の返球場面

No.	ストレート展開に変わるキッカケの配球と左 or 右の展開	ストレート展開の1球目の返球場面
①	正クロス展開から、相手のストレート(ロビング)で自分たちの「左ストレート展開」に	自分が(走って)打つ
②	正クロス展開から、自分のストレート(ロビング)で自分たちの「右ストレート展開」に	相手が(走って)打つ
③	逆クロス展開から、相手のストレート(ロビング)で自分たちの「右ストレート展開」に	自分が(走って)打つ
④	逆クロス展開から、自分のストレート(ロビング)で自分たちの「左ストレート展開」に	相手が(走って)打つ

※①と③は相手にストレート展開を「仕掛けられた」場合、②と④は自分から「仕掛けた」場合になる。ロビングが使われるのは主に雁行陣の場合で、配球は前衛をかわすためにロビング系になり、仕掛けられた側の後衛は逆サイドまで走って1球目を打球しなければならぬ。

ンドの距離(長さ)を比べると、対角で打ち合うクロスは、サイドラインと同じストレートに比べて約2・4メートルも距離が長くなります。実際に選手に聞いてみると、感覚的にクロスのほうが長いということもわかっていても、その違いはせいぜい1メートル程度だと思っている人がほとんどです。実際はその倍以上長さが違うわけ

ですから、影響が出るのは必至といえます。

たとえばよくあるのは、クロス展開からストレート展開に変わった時、最初のボールをクロス展開と同じ感覚で打つてしまい、オーバーしてしまうというケースです。逆に「短いボールを打たなければ」と思うあまり極端に短いボールになり、次の展開で苦しくなることもしばしばあります。コート上の立ち位置が同じだけに、コースによってそうした距離の打ち分けをするのは、感覚的によりむずかしいともいえるでしょう。

これらの理由から、多くの中学生は「ストレート展開」に苦しい意識を持ちやすいというわけです。

展開が変わった直後の対応が重要

先述したように、ソフトテニスは必ず正クロスか逆クロスのサーブからプレーが始まります。ですからストレート展開になるということは、どちらかがコースを変えた結果そうなった、ということです。この時、コースを変えたほうを「仕掛けた側」、コースを変えられたほうを「仕掛けられた側」として、話をさらに掘り下げてみ

ましょう。

中学生に多い雁行陣ではクロス展開からストレート展開に変わる起点の多くは、ロビングです。中でも一番よく起こるのが、正クロスから前衛オーバーのロビングを打って、自分たちの右ストレート展開に持ち込むパターンです。その反対に、相手に正クロスから前衛オーバーのロビングを打たれ、自分たちの左ストレート展開に持ち込まれるケースもよくあります。この2つの違いは、「仕掛けた側」がその場にいる一方、「仕掛



右ストレート展開で打ち合う

けられた側」は走ってそのボールを取りにいかねばならない、述したように、ストレート展開をむずかしく感じるのは、この1球目の対処に苦しむからです。

一方で、2球目の処理に向けた準備もまた、重要なポイントになります。特に雁行陣で起こりやすいのは、展開の変化に際したリアクションが遅れ、フォーメーションに穴ができてしまうケースです。中学生ではもっともよく見られる目の打球場面を整理したものです。仕掛けられた側にとってもっとも重要なのは、いうまでもなく移

表1は、ストレート展開になる4つの主な配球パターンと、1球目の打球場面を整理したものです。仕掛けられた側にとってもっとも重要なのは、いうまでもなく移

ここで大切になるのは、「ボ